

研修レポート



日 時：2026 年 5 月 11 日

講演 名：「こうのとりのゆりかご」から始まる第2の人生

講師：宮津 航一 氏 (いのちの語り人)

会場：尼崎市議会 議員総会室

参加 者：真鍋 修司 福島さと 真田 泰秀 中尾 健一 中村 敦子 野子 あり 東浦 小波子
田中 俊幸 永藤 正明 上田 さおり

報告 者：田中 俊幸

1 講師プロフィール

講師の宮津航一氏は2003年生まれ。2004年に生みの母を交通事故で亡くし、2007年5月、熊本市の慈恵病院が運営する「こうのとりのゆりかご」の開設初日に、3歳で預けられた。同年10月、里親である宮津美光・みどり夫妻に引き取られ、2020年12月、高校2年のときに普通養子縁組が成立している。

2021年6月には「ふるさと元気子ども食堂」を発起人代表として開設し、2022年3月、こうのとりのゆりかごに預けられた生い立ちを実名で全国で初めて公表した。同年4月に熊本県立大学総合管理学部に入学し、在学中の2023年10月には、慈恵病院元看護部長の田尻由貴子氏とともに「子ども大学くまもと」を設立して理事長に就任。2026年3月に同大学を卒業し、同年4月から「いのちの語りびと」として講演活動を本格的に始めている。

2 講演内容

里親である宮津夫妻は、航一さんの年齢に応じて、生い立ちを包み隠さず伝えてきたという。実母が自分を産んですぐに事故で亡くなったことを知った際も、両親は「病院の先生に救ってもらってよかったね」「こうして出会えてよかったね」と、事実をすべて前向きな言葉に変えて伝え、航一さんはそれを受け止めて乗り越えることができたと言った。

「家族とは、最後まで味方でいることだ。何があっても最後まで味方でいるのが家族だ」という言葉が、あふれる愛情を受けて育った宮津さんの実感として語られた。現在22歳の宮津さんは、こども食堂と子ども大学の運営、そして自らの生い立ちを公表しての当事者活動を続けている。

「最後はゆりかご（いわゆる赤ちゃんポスト）がいらない社会にしていきたい。ゆりかごは最後のとりでであり、セーフティネットである。お母さんを責めても何も生まれない。また、どのような過去であっても、子どもにとって自分のルーツを知ることは大切だ。置かれた場所で咲きなさい（マザー・テレサ）」と、真剣なまなざしで訴える若き講師の声が印象に残った。

3 尼崎市児童相談所

尼崎市では2026年4月に「尼崎市児童相談所」が開設された。本市における児童虐待相談件数は令和6年度で1,024件にのぼり、これは8年前の約2.5倍という水準である。一時保護件数は410件、一日あたり平均22人の子どもが何らかの形で一時保護されている状況にある。

本相談所は、子どもの支援センターいくしあの家庭児童相談機能と一体化しており、共通の支援方針のもとですべてのケースを共有する体制を取っている。定員30人の一時保護所も併設（併設場所は非公開）され、里親委託の推進にも取り組んでいる。

4 所感

どのような過去であっても「真実をどう伝えるか」「自分の出自にいかに向き合うか」という命題は、本講演において当事者である講師の話の中でもっとも胸に響いた言葉であった。里親夫妻が航一さんに生い立ちを隠さず、すべてを前向きな言葉に変えて伝え続けた姿勢は、児童福祉を支える行政や議会としても学ぶべき点が多い。子どもにとって自分のルーツを知ることの大切さ、そして講師が心に刻むマザーテレサの言葉「置かれた場所で咲きなさい」に象徴される、逆境を受け止めながらも前を向く力は、支援のあり方を考えるうえで忘れてはならない指針である。

本市では本年4月に児童相談所が開設された。虐待相談相談件数が8年間で約2.5倍に増加している現実を踏まえれば、一時保護から里親委託、そして子どもがその後の人生をどう歩んでいくかまでを見据えた切れ目のない支援体制に大きな期待が寄せられる。宮津氏のように、支援を受けた当事者自身が声を上げ、社会に理解を広げていく取り組みは、これからの制度設計や施設運営に資する貴重な役割を果たしている。今後の議会活動において、児童相談所の運営状況や里親委託の推進状況を継続して注視し、当事者の声に学びながら、実効性のある提言につなげていきたい。

